

## はじめに

私たちは、みんな幸せを求めている。

けれども、自分の思うようにならないとき起こるものは、怒りであり、愚痴であり、時としては憎しみである。往々にして楽を求めて苦を増し、苦を捨てようとして新しい苦を生む有り様である。

人間生存の矛盾ともいうべき、この恐ろしくあさましい姿から抜け出るためには、いったいどうすればいいか。仏教はここに生まれたといってもよい。

もし、私たちが際限のない欲望から解放され、自らの心を管理し、他の人間や生命に對して慈愛の念を養い、より高い視点に立つとするならどうだろう。

もし、私たちが、他人や社会を踏まえ、現在の行為が将来どのような結果を生むかを考え、未来の人々のことも踏まえた生き方を心がけるとするならどうだろう。

きつと、生きる喜びや働きがい生まれ、明るくさわやかな社会が到来するに違いない。

宗教が人間の内面を説くことよりも、政治や社会構造という外枠を改革する方向にトーンを強めると、とんでもない方向に走りがちである。そもそも積尊が権力を捨てて、出家された理由はそこにあった。

人間の幸せを願って起こった仏教は、あくまで人々の心に密着しつつ、ものの思い方や心を教えることに力点を置き、生きる希望と喜びを与えるものでなければならぬ。

そのためには、それぞれの人間に秘められた能力や可能性を引き出し、個性や主体性を発揮させることである。そして、その修行はまずそれぞれが「自分」を見つめることから始まるのである。

人間の「自我」には善良な心もあれば、相矛盾するエゴや醜い心もある。四季の変化によって花が咲いたり、葉が散ったりするように、人の心もまた気分の変化によってさまざまな思いが起こる。変化してやまない「心」。しかし、その奥には不変の生命が存在している。

常に心の善玉が作動すればいいが、悪玉が動き回ると心を濁し、歪ませ、苦しみや悩

みをもたらし、根本の生命そのものまで狂わせてしまうことになりかねない。

これを打開するためには、倫理や道徳などのように外部から規制していくという方法ではなく、生命そのものを解明し、変革しなければならぬ。

それは、ちょうど野菜や果物が中心から外へと成長していくように、生命の極から思想、行動を改善する。それこそが真理の法則なのである。

そこで、もし生命の根源に触れる「悟り」が起るとすればどうだろう。それまで心を覆いつくしていた障害物が取り除かれ、生命本来の働きが活性化され、根底から救われるはずである。

そして、その知恵によって初めて正しい人生観や社会観が身につき、確固たる自己が築かれ、歩むべき道や可能性が開けていくに違いない。私は、ここに「諸法実相」の価値を見出し出している。

宗教界では、この諸法実相を「ありのままの姿」と解釈しているが、これは仏陀釈尊の本意ではない。人間の内奥に光を当て、自己を観察し、新しい生命を発現させるといふ未曾有の法門である。そして、誰もがこれを習得できるところに価値がある。

現代社会は確実に病んできている。情報の濁流に呑み込まれ、自分が自分らしく生き

られない世の中になった。世の流れに押し流されず、真実の自分を見失わず、幸せを勝ち取らなければならない。

本書は、この「諸法実相」を中心として仏教による自己啓発と社会浄化の道を示したものであり、「こころの創造」と名づけた。皆さんの人生の参考になれば、これに過ぎる喜びはない。

平成七年水無月

く龍華殿にてく

こころの創造 ● 目次

第一章 劣等感からの脱出

登校拒否児の出家 18 苦惱 28 怪獣「アリゴン」と狼少年 32

「飛べ、やる気だ！」 41 魔王更生<sup>こうせい</sup> 45 和顔愛語<sup>わげんあいご</sup> 48

第二章 本当の自分らしさ

すべて受け止め方 52 振り回されず、振り回さず 55

三方融和<sup>ゆわ</sup> 58 怒りを捨てよ 61 自分を愛する 63

豊饒の大地の上に<sup>ほうじょう</sup> 67

第三章 「心」の発見

諸法実相<sup>しよほうじつそう</sup> 74 魔網<sup>まもう</sup> 77 お乳 78 心の部屋 81

蛙から大黒へ転身 84  
予知夢 89  
虫の知らせ 93  
止念観しねんくわん 94

#### 第四章 観音かんのんの教えに学ぶ

キャノンと観音 100  
弟子育成からの悟り 107  
神と仏、菩薩について 117

#### 第五章 家庭と社会

変革の基本 120  
「はじめ」と「角つゎ」 130  
積み木の積み直し 137  
奥義を求めよ 166  
妻の座を守れ 168  
女人成仏にょにんじょうぶつ 171

はじめ社会 124  
悪口という名の抑圧 128  
夫婦喧嘩 134  
オアシスへの旅 153

#### 第六章 女人成仏にょにんじょうぶつ

「ワニ」の性格 173  
青い栗の実 176

第七章 幸福と平和

---

人類存亡の危機

182

生命の湧現うきげん

186

あとがき

190

表紙カバー・グラビア絵 || 林ひさえ



第一章 劣等感からの脱出

## 登校拒否児の出家

「手がかかると思いますが、よろしくお願いします」

登校拒否の彼を預かったとき、ご両親は深々と頭を下げて手を合わせられた。どうか中学校を卒業した彼は、神奈川の都会から九州佐賀の山間にある私の寺に入山し、出家することになった。

最初の三か月は庭掃除専門。境内けいだいを掃き清めることで心の垢あかを除かせ、来る得度式（僧侶になる儀式）に備えさせようとしたのである。

「掃いても掃いても、境内はちりで汚れる。心のちりはいつ、どうやってたまるか考えてみなさい」

その昔、お釈迦様しやくかから庭掃除を命じられた仏弟子シャカダは、朝から夕方まで堂塔境内を清めながら、「ちりも垢も我が心にあり」と悟りを開いたといわれているが、十五才の少年にはこれはちょっと難しいようであった。どこかの犬とたわむれていたかと思うと、ほうきを境内に放りっぱなしで行方不明になることがあった。

「ほうきを放棄ほうきするなんて、シャレにもならないぞ」

さわやかな夏のある日、彼は墨染すみぞめの衣ころもをまとった。クリクリと剃そった小さな青い頭は愛らしかった。あれから六年が過ぎ、今ではもう二十一才。ずいぶん凜り々りしくなったものだ。

彼は幼稚園の頃から異常なほど集団生活が嫌いだった。恥ずかしさも手伝ったのか、運動会のダンスなどは断固拒否した。一旦、言い出したらテコでも動かない頑固な一面があった。

やがて小学校に入学。授業が少し難しくなってくると、今度は勉強ぎらいになった。

「新生児黄疸おうだん」という病気のために、彼は生まれてすぐ体内の血液を全部入れ替えたが、そのためではないかと母親はあちこちと信仰の遍歴へんれきを重ねた。

「大器晩成型だから心配ありません」

「二十才までは大変だけど、それを過ぎれば立派になるでしょう」

私が初めて会ったのは、彼が小学五、六年生の頃だった。布教先のある信者さんの自宅で、母親は彼が集団生活になじめない上に勉強をせず、夜尿症もあり、同級生から「いじめ」にもあっていることなどを話し、いい知恵はないかと相談を持ちかけた。

「いいなりになるな。そんなときこそ意地を出しなさい」

私が勇気づけようとしてそう言うと、彼はとてもできそうにないといった表情で首を横に振った。

「大丈夫だよ。根性と信念を与えてくださる神様がおられる。この神様に、『今から喧嘩しますから僕に力を与えてください！』と念じて飛びかかりなさい。絶対に勝つか  
ら」

「その神様の名前は何とおっしゃるんですか？」

母親の方が真剣なまなざしで尋ねた。紙に書いて母親に渡すと、彼ものぞき込みながら感心したように何度も小さくうなづいていた。勉強については、そう細かな指導はしなかった。

母親のもう一つの心配は夜尿症のことだった。

私は目を閉じて心の中で経文きょうもんを唱えながら念じた。

「よし、だいじょうぶ。今おまじないをしたから、これで良くなる！」

母親は懇懃いんぎんに頭を下くだげ、彼も笑みを湛たたえて帰っていった。

ところが、である。あとで彼が白状したことであるが、家に帰ってから私は母親から試ためされるはめになったらしい。

「あんなに言われたけど本当かしら？」

真偽しんぎを確かめるために、すいかを二日間にわたって彼に食べさせたという。それまで水分を控えることを強しいられてきた彼は、戸惑いながらもかぶりついた。すいかは彼の大好物だった。しかし、それから夜尿症は二度と起きなかった。

数日たった頃、母親からお礼の電話があったが、途中で彼に代わってもらった。

「僕、グループのボスをやっつけました」

「そうか。それは良かったねえ」

「それから、ここしばらく僕には手を出さなくなりました。『おまえ強いのもう』と言われました」

母親にとって、彼の勉強心を除いてはとりあえず「心願成就しんがんじょうじゆ」ということであつた。彼は絵が上手だつた。私と縁があつてからよく仏画を描くようになったという。靈感が強くなりだしたのもその頃からである。家族の病氣の原因や母親が生計のたしにしてある株の値上がりのことまでわかるようになった。母親はどの銘柄を買えばいいか彼に尋ねては一儲けひとちぎしていたようである。

「ねっ、お願い。今度はどれがいいか、お釈迦様に聞いてくれない？」

彼はしばらく閉じていた目を開けると、母親をたしなめて言った。

「お母さん、お釈迦様が、『これ以上の欲はいけません！』だって」

彼が祈ると的中するので、家族は事あるごとに彼に頼むようになった。

その後、父親の転勤のために家族全員で神奈川へ引っ越して行ったが、その頃の体験にこういうものがある。

転入したばかりの学校から、彼は緊急に自宅へ電話しなければならぬことが起こった。しかし、あいにく新しい電話番号がわからない。そこで彼は電話口で釈尊にお尋ねした。言われるままに番号を押すと自宅につながった。びっくりしたのは母親の方である。

だが、登校拒否を起こすようになったのもその頃からであった。それは勉強と友達関係の二つが原因だった。そんなに願いが叶うなら学校へ行くように守護してもらえばいいのと思われたが、それとこれは別問題のようだった。

彼の家庭は明るく楽しかった。こんな幸福な家庭はめったにないだろう。いつも笑顔を絶やさず辛抱強く働く父親。玄関の送迎ではご主人にキスを欠かさない母親。

「今でも、私のことを久美ちゃんと呼んでくれるんです」



人前でもあっけらかんと言っているのける。周囲が笑うと、一緒になって笑いころげるような明るい女性であった。

ほかの子供たちも、頭が良く、素直で優しかった。そんな家庭に、どういうわけか登校拒否をする彼がいた。しかし、彼には誰もが及ばない「超能力」があった。

幾度かお寺にやって来た頃、私の寺の先代管長であった無辺行むへんぎょう下げが、ほほえみながら尋ねられたことがある。

「どう、お寺に来る気はないかね？」

彼は冗談と思ったのか笑顔のままだったが、母親の方がスルリと話題を変えた。

しかし、登校拒否は依然として続いていた。一日中家の中でぶらぶらする彼に家族も手を焼くようになった。

そんなとき、彼が母親にこう切り出したのである。

「仕方がないから、お寺に行こうかな？」

「やめときなさい。修行は厳しいらしいわよ。山の中で何にもないし、それに洗濯も洗濯板でしなければならぬし、お風呂もお釜らしいし、竹筒でプツと吹いて火を起すらしいわよ。あなた、それでもやれるの？」

「お母さん、今時、そんな寺があるの？」

もちろん、ここは神奈川のように都会ではないし、ネオンらしきものといえば信号機ぐらいしかないが、洗濯機はあるし、風呂もボイラーで沸かすようになっていた。表現がちよっとオーバー過ぎたようである。

それでも、彼はだんだんと覚悟を決めていった。ただ、それまで親の庇護<sup>ひごか</sup>下にいたため、何を頼りにすればいいか少なからず不安があった。そんな胸中を察してか霊夢<sup>れいむ</sup>の中でお寺での生活を体験させられたり、「法を宿せば、大丈夫だ」と、仏様の励まし<sup>れいむ</sup>の声を聞いた。ただ、その頃の彼にはまだ「法」というものがわからなかった。

そうしたある日、進路指導の先生は彼の将来を案じて母親に尋ねた。

「これから、どうしますか？」

「本人がお寺に行く決めてるようです」

「すぐ帰ってくるに決まっていますよ」

先生は半ばあきれたような顔で言い放った。

団体行動が大の苦手の彼が、厳しい寺の修行に耐えられるはずがないと思うのは、ごく当然だった。彼のご両親もそのことを非常に案じておられた。

やがて、決意を固めた彼は、私の第一期生の弟子として入山の日を迎えた。ご両親が挨拶に見えられたとき、私はこう話をした。

「一般社会のエリートコースを歩ませるつもりなら学歴が必要でしょうが、彼はそんな仕事をするために生まれてきたものではありません。道は歩んだ者でなければわからないように、彼は自分が悩んできた体験をもとに、これから同じ悩みを持つ人々を助けるために、この世に生を享けたのです」

とは言うものの実際、十五才の若さで初めて体験する寺の生活は大変だった。

早朝の起床、勤行ごんぎょう、掃除、洗濯、衣ころもの管理など、すべて自分一人でやらねばならない。世話係をつけたが、あちらこちら彼を探し回る有り様であった。

## 苦 惱

やはり、彼にとって団体生活は想像以上に厳しかったようである。

与えられた仕事をすっぱかし、雲隠れしてはタバコを吸う。夜になるとひそかに食品庫から菓子類を持ち出す。それを注意されると反抗的な態度に出る。眉毛を黒く描いたかと思うと、まっげを切る。洗濯もしない。そうした行為が何度も繰り返されたが、すべてストレスから起こる行動だった。当然、靈感も薄れていった。

元氣のない彼を見て、気晴らしに遊園地に連れて行ったり、一緒にスポーツをしたこともあったが、それでは問題解決には至らなかった。

彼を預かった以上、ご家族に余計な心配はかけたくなかった。しかし、やがてそうした素行が母親の耳に入るところとなった。

私に会うたびに、ご両親は「ご迷惑をおかけしているのでは」と心配されたが、「まあ、任せてください」と答えていた。神仏の存在を肌で感じている彼だから、いつか立ち直ることを信じていたのである。

それでも母親は常気がかりで、いつも神奈川の地から彼のことを祈っていた。親というものは、ありがたいものである。

不思議なことに、彼が家に帰りたいと思っているときは、母親にもわかるようであった。近くの駅まで来ている夢を見たり、頭は坊主なのに姿は私服という夢を見たときは、きまって彼が投げやりになったり、すさんでいるときだった。

一度、もっと不思議なことが起こった。

あるとき、母親が夢の中で彼と話をしていると、それまで虫歯だらけだった彼の歯がいつの間にかきれいになっていたというのである。事実、ちょうどその頃、彼を歯医者に通わせていて、ほとんどきれいになっていた。

「治療したんですねえ。こちらにいたときには絶対歯医者に行かなかったのに」

母親の一念というか、彼の修行態度はすべてお見通しだったということである。

極楽であるはずの仏の世界。それに一番近いところにいる彼が、地獄のような世界にいたとは奇妙な話であるが、これも避けては通れない課題だったのかもしれない。

彼の心情を思えば私も辛かった。また、ひとたびレットルを貼られると信用を取り戻すのは大変である。彼自身の将来を決定づけてしまうことにもなりかねない。

しかし、弟子を育てるのは師匠の役目。未熟だからこそ修行に來たのであり、責任はすべて私にある。何とかして一人前の法師にできないものかと私も悩み続けた。

彼の心理状態は眼や挙動でわかった。周囲を避けようとするときには必ず何かあった。家に帰りたいたいと思っているのではないか、そうすれば楽になると思っているのではないか。しかし、このまま帰しても決して社会には通用しない。その挫折が重なったとき、いったいどうなるだろうか。そう思うと、何としても彼の心を修正させたかった。

「釈尊が菩提樹の下に座ってお悟りを求めておられるとき、悪魔がやって来て囁いた

そうだ。『そんな苦しい修行を続けても得られるものは何もない。城に帰れば、美しい妻や可愛い子供がいるし、立派な屋敷も、たくさんの召し使いもいる。何不自由ない生活もできるじゃないか。さあ立ち上がって城へ戻れ。おまえが、そうして何年座ろうと、悟りなど開けるものではない』と。でもね、釈尊は毅然きげんとして誘惑に負けられなかったんだよ……」

「どう思う？」

「すごい勇氣ですね」

「そう思うだろう。君も、そのわがままな心を取らなきゃいけないね……」

「僕は今まで、ずいぶんわがままな生活をしてきたためか、厳しく言われればどうしても押さえがきかなくなりませす。それで毎日毎日が自分との戦いです」

「頭でわかっているながら、心がいうことをきかない。君は優しい心もあるが、わがままを通そうとする。心は一つではないということだ。いい心の衆生しゅうじょうも、悪い心の衆生も混じり合いなから住んでいる。お釈迦様は『放逸ほういつ』ということを一い番嫌われているから、

わがままな心を起こす悪魔を退治しなければならぬ。悪魔が騒ぐときには、すぐ私のところへ来なさい。『援軍』を送ってあげるから……」

お茶を飲みながらこう話したことがある。緊張した気分を取り除いて話すことが彼には必要だった。ところが、話が終わり自分の部屋に戻った途端、彼の気分はまた元に戻ってしまうのであった。

## 怪獣「アリゴン」と狼少年

紅葉が真っ赤に谷を染める晩秋のある日、恒例の顕密研修会が開かれた。顕密研修会というのは、年に三回仏教の奥義を極めようとする人々が集まり、法華経の聞法や滝の水に打たれる修行のことである。

講義が終わって、理解できているかどうか彼を部屋に呼んだが、どうもあまりわかっていないようであった。